箱根集会報告（第 6 回）　　**"The Cop and the Anthem" 「構造読み」**

私はこれまで箱根集会の報告を関連するものを含めて合計 5 回行ったが、その中で "The Cop and the Anthem" の構造読みワークショップについてはまだ書いていなかった。ずっと気になっていたのだが、先日の近況報告会のときに寺島先生から「記録を残しておくとこれから実践する人に役立つのではないか」と勧められた。あれからすでに 2 ヶ月半が経っているが、プリントに残されたメモを元に書き出していきたい。

このワークショップは前日に始まった「理論学習：なぜ O.Henry を教材化するか、"読み" とは何か、"Nexus 読み"とは何か」、「"Nexus 読み" ワークショップ」に引き続いて行われた。寺島先生が司会（進行役）を務められた。最初に『学力とは何か』pp.42-49 を読み合わせして文学作品の典型構造が「導入+展開＋山場の部＋終結部」であること、最高潮（クライマックス）が山場の部にあることを確認した。

その後に参加者には 30 分ほどの時間が与えられ、48 段落を上記の観点で分割するようにとの指示があった。討議で最初に検討されたのは「どの段落が展開部の始まりとなるか」という問題だった。最初に「段落 6 が展開部の始まりではないか」という意見が出た。Soapy が越冬するために刑務所行きを決意し早速その願望の実現に取りかかった」と書かれているというのがその理由だった。（Soapy, having decided to got to the Island, at once set about accomplishing his desire.）

それに対して「段落 7 が始まりではないか」という反論が出た。Soapy がその願望の実現のために「実際に体を動かしてベンチを離れ公園の外に出た」というところに着目した意見だった。（Soapy left his bench and strolled out of the square ... .）

前者は Soapy の心中の変化に、後者は彼の行動開始に着目した意見であったが、その後に Soapy が場所を次々と移動しながら何度も失敗を繰り返えしていく話の流れがあるので「公園内→公園外」という観点から後者が採用された。

次は「展開部はどこまで続くか」が検討された。「段落 38 が展開部の最後ではないか」という意見が出された。Soapy による 7 度の空しい試みの最後である「傘を盗む行為」がここで終わるからである。"He hurled the umbrella wrathfully into an excavation."という記述があり、その後に自分を捕まえてくれない警官への恨み辛みが書かれている。

すると展開部の終わりは段落 38 ということになるが、そのときのメモを見るとそこには区切りの線と×が付けられて、段落 39 の後に区切り線と◎が付いている。

段落 39　At length Soapy reached one of the avenues to the east where the glitter and turmoil was but faint. He set his face down this toward Madison Square, for the homing instinct survives even when the home is a park bench.

段落 40　But on an unusually quiet corner Soapy came to a standstill. Here was an old church, quaint and rambling and gabled. ...

どんな議論があったのかは記憶に残っていないので私の推論になるが、段落 40 では彼の改心を促すきっかけとなる「オルガンが奏でる賛美歌」が聞こえてきた教会が出てくる。一方で、段落 39 には彼が自分の計画を諦めて公園のベンチに戻ろうとして顔を南に向けたことが書かれていてそれが教会の発見につながる。

Soapy のいる位置はどうだろうか。But on an unusually quiet corner Soapy came to a standstill. という文から考えると段落 39 の場所からは少し移動したように思えるが、段落 38 から段落 39 の移動幅と比べるとごく小さいだろう。私はきっとそう考えて段落 39 を山場の部の始まりとしたのだろう。

しかしいま改めて考えてみると、But は「切れ」が強い接続詞であり、At length（ついに）は展開部の最後にふさわしい副詞句とも考えられる。なかなか悩ましいが、段落 39 を Transitional な段落としておくのも一案かもしれない。

次に議論されたのは「クライマックスはどこか」という問題である。結論から先に言うと第 48 段落である。つまり終結部はなしで山場の部の一番最後の文である "Three months on the Island," said the Magistrate in the Police Court the next morning. がクライマックス（解決→破局）になっている。心を入れ替えて再出発しようとした浮浪者 Soapy を待っていたのは「禁固三ヶ月」という治安判事からの言い渡しだったのである。

題名読みについても寺島先生から問いかけがあった。「the cop と the anthem は何を象徴しているのか」。新見さんが「the cop は "権威、体制"。それに対して the anthem は "救い" ではなかろうか」と回答された。この作品は 1906 年に出された第二短編集 *The Four Million* に収められているのだが、当時の大都市ニューヨークの民衆にとっての「救い」は教会しかなかったのであろうか。

思い起こすと、この話が私たちの研究会で初めて取り上げられたのはもう 20 年ほど前になるだろうか。「基礎教材」と「感動教材」の間を埋める候補になり、その教材作成のためのワークショップがあったのだが、そのときも寺島先生は岐阜の街で見かけるホームレスの人たちの存在に言及されたことを覚えている。そのときよりも現状はさらに酷くなっている。当初に計画された O.Henry の 3 話から時間の関係で 1 つに絞らざるをえなくなったときに寺島先生がこの話を選んだ理由もそこにあったと思う。

話を主題読みに戻すと、実は、私はクライマックスは段落 43 だと考えていた。Soapy が心を入れ替えてもう一度やり直そうとした場面である。An instantaneous and strong impulse moved him to battle with his desperate fate. という文の後に Soapy の心情が He would

（～するんだ）というフレーズが 8 回も繰り返えされて表現されている。描出話法は段落 30 でも Would never a policeman lay hands on him?という文で出てくるが、たった一文、挿入されているだけである。

この話法は日本の小説でもときおり見かけるものだが、英語でも人称や時制は変わるものの、やはり同様に作者が登場人物の気持ちを地の文に投げ出すときに現れる。私はその反復された英文に作者の強い想いを感じて段落 43 を選んだのだが、松村さん（初参加）から「いや段落 48 ではないか」と反論があった。そのとき私はその反復は皮肉な結末を描くために作者が周到に用意した伏線だということに気づかされた。

以上で報告を終わりますが、記憶違いがあるかもしれません。参加された方でお気づきの点があればご指摘いただけるとありがたいです。よろしくお願いいたします。（2020/03/19）